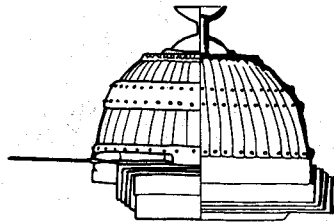


紀 要

第 4 号



1990. 12

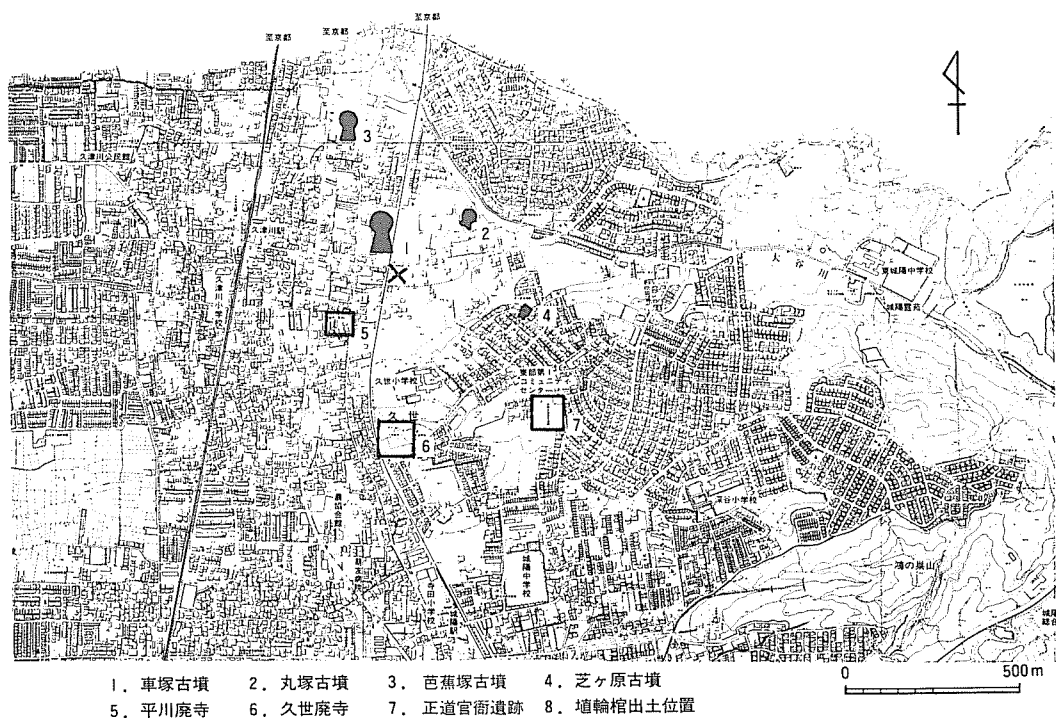
財団法人 滋賀県文化財保護協会

9. 京都府城陽市出土の埴輪棺について

小泉裕司

1. はじめに

ここで報告する埴輪棺は、城陽市に位置する久津川車塚古墳の範囲確認調査で出土したものである。調査経緯や検出状況についてはすでに報告済み⁽¹⁾であるが、使用されている埴輪については未整理分もあり、不十分なものとなった。この場を借りて報告を行うとともに若干の考察を行ないたいと思う。



第1図 周辺遺跡図

2. 歴史的位置と環境

城陽市は、京都府の南部、南山城のほぼ中央に位置する。市域は、東側に南北にはしる丘陵地と西側の木津川のできあがりあげた沖積平野からなる。東部丘陵からはいくつかの河川が東西に流れ木津川へと流れ込み、丘陵裾部に扇状地をつくりあげている。

市域北部を流れる大谷川が形成した低台地状扇状地とこの扇状地の南北に存在する丘陵上には

古墳時代前期から後期にかけて断続的に古墳が築かれる。発生期の古墳とされる芝ヶ原古墳は、この南側丘陵上に所在する。南山城最大の中期古墳久津川車塚古墳はこの扇状地中央に位置し、扇状地上に点在する丸塚・梶塚・芭蕉塚古墳とともに平川古墳群⁽²⁾を形成する。また、6世紀末から7世紀初頭には、南側丘陵上に集落が形成され、さらに、7世紀末から8世紀になるとこの扇状地周辺には、4つの寺院(平川廃寺・久世廃寺・正道廃寺・広野廃寺)と山背国久世郡の郡役所が造られる。このように、城陽市北部地域は古墳時代・奈良時代を通じての南山城における政治・文化の中心的位置にあったものと思われる。

3. 出土埴輪

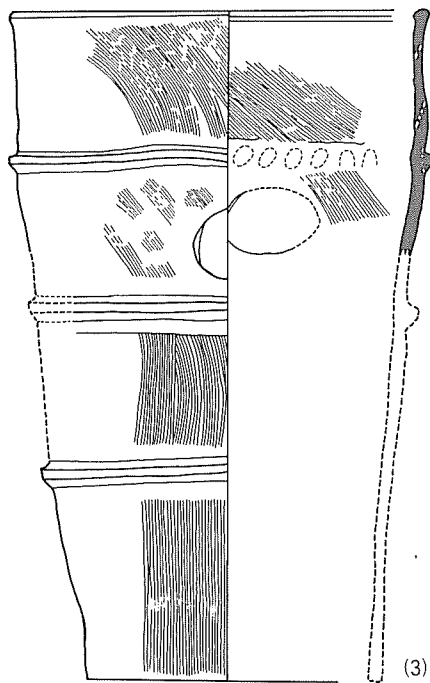
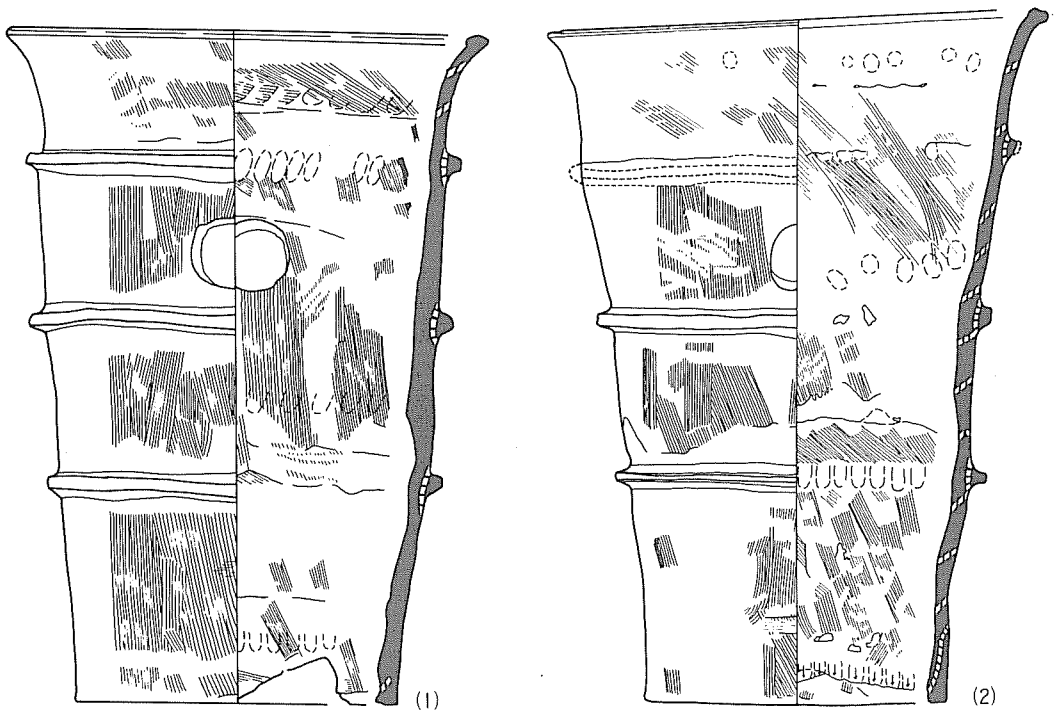
今回出土した埴輪棺は3個体の円筒埴輪が使用されている。3個体とも調整技法の省略が見られ、そのためかなり明瞭に埴輪成形過程が観察できる。ここではやや詳細にそれらについて述べていきたい。

(1)は、埴輪棺北側に使用されていたもので、1個体そのままを利用している。口径34.9cm、底径24cm、器高51.25cmを測る。口縁部は、大きく外反し、端部は内側を肥厚している。3段目には対向する円形スカシ孔が穿たれている。タガは、断面台形のもので下部に貼りつけ痕を明瞭に残す。底部には調整は見られないが、打ち欠けが見られる。

まず、幅約3cmの粘土紐を右回りに巻き、基部成形をし、この基部のうえに、ほぼ同じ幅の粘土紐を用いて1段目を成形する。外面は、4本/cmのタテハケを下から上へ施す。内面は12本/2.3cmと7本/1.3cmを原体とし、左上がりのナナメハケ・ヨコハケ・タテハケが不規則に施されるが、上から下へ施されている。この後さらに幅約3cmの粘土紐を使用し、2・3段目と4段目の半分まで巻き上げていく。1段目のタガのやや上部内面には、粘土紐あらためて積み重ねたときの撫で付け痕と粘土接合部が明瞭に観察できる。外面は12本/2.5cm、内面は15本/2.4cmと17本/3cmを原体とするタテハケ調整が見られ、内面は上から下へ施す。この時点でタガを貼りつけ、3段目にはスカシ孔をあける。スカシ孔は、外面からヘラ状工具を使用し、下部から左回りにあけられている。この後粘土紐を2段積み上げて、口縁部を成形する。内面には1段目と2段目同様粘土つき痕が明瞭に残る。4段目は、この時点で内外面とも6本/cmの左上がりのナナメハケを施したのち、横ナデを施している。朱を塗布し、焼成している。焼成そのものは良好であるが、全体の半分近くに黒斑が見られる。

(2)は、埴輪棺南側に使用されていたもので、3段目中央付近で打ち欠かれている。これは棺の長さを調整したためと思われる。南北の小口や小口上部、南棺と北棺のつなぎ目など覆っていた破片を整理した結果、打ち欠かれた埴輪片はおもに南小口部に使用されていることがわかった。口径37.5cm、底径24cm、器高52.4cmを測る。3段目付近から口縁部にかけて外側に徐々に外反しており、口縁部はさらに外反する。口縁端部は、肥厚されており上面はやや外側に向く。3段目には対向する円形スカシ孔が見られ、タガは断面台形のものを使用する。

基部成形は、幅約5.6cmの粘土紐を左回りに巻いて行ない、さらに幅約3.4cm～4cmの粘土紐を2段巻き上げ2段目中央まで成形する。この時点で、器壁が薄くなったためか内側に粘土貼りつ



第2図 埴輪実測図

けて補強している。底部外面には、ヘラ状工具による底部調整が見られる。外面には9本/2.1cmの原体によるタテハケ調整、内面には12本/3.2cmの原体による左上がりのナナメハケ調整を施し、1段目のタガを貼りつける。この後さらに3段目まで粘土を巻き上げて成形する。この時新たに粘土を巻き上げた接続部には幅3cmのヘラ状工具による撫で付け痕が認められる。外面は、1段目と同じ原体によるタテハケ調整、内面は16本/2.5cmのナナメハケ調整が施され、2段目のタガが張り付けられる。4段目を巻き上げ、口縁部を成形する。外面は、摩滅が著しく調整は非常にはっきりしないが5本/cmの左上がりのナナメハケの後横ナデが施されているようである。内面は、16本/2.5cmの左上がりのナナメハケ調整が施される。3段目のタガを貼りつけ、外側から左回りにスカシを穿孔し、朱を塗布し焼成されている。焼成は良好であるが全体に黒斑が見られる。

小口部や北棺と南棺の接続部、小口部の上部や埴輪棺上部を覆っている破片に底部や2種類の口縁部の破片が見られることから埴輪棺本体と別にもう1個体分の円筒埴輪が使用されているものと考えられた。これらの破片を整理した結果、3個体目の器形をほぼ復元することができた。埴輪棺は、現在の耕作土直下の地山を掘りこんで構築されているが、北側小口部は検出状況からやや地山面より高かったと思われる。このため耕作などにより一部攪乱を受けており、本来はこの部分も埴輪片で覆われていたと考えられる。3個体目の埴輪欠損部分についてはおそらく北側小口上部に使用されていたと思われる。

(3)は、口径28.5cm~30.6cm、底径21.8cm~24.1cm、器高50.5cmを測るが、全体にかなり歪んでいる。特に1段目の歪みが大きい。1段目から3段目にかけてはやや外反するが、4段目は他の2個と異なりほぼまっすぐである。口縁端部はやや肥厚するが外反はしない3段目に対向する円形スカシ孔をもち、タガは断面台形状を呈する。基部成形は、幅約2.7cmの粘土紐を右回りに巻いて行ない、底部にはヘラ状工具による成形痕が見られる。この基部のうえに幅約3cmの粘土紐を巻き上げ1段目を成形する。外面は5本/cmのタテハケ調整、内面は12本/2.8cmの原体によるタテハケ調整を行なう。さらに3段目まで粘土紐を巻き上げ、外面には5本/cmのタテハケ調整、内面には20本/3.5cmの原体によるタテハケ・ナナメハケ調整が施される。内面のハケ調整は、下から上を行われている。ここで1・2段目のタガを貼りつけ、スカシをあける。スカシ孔は内側から左回りに穿孔されている。この後4段目を巻き上げ、外面は18本/cmの原体による左上がりのナナメハケ調整、内面は5本/cmの左上がりのナナメハケ調整を施す。口縁部を横ナデにより成形し、タガを貼りつけを行なっている。朱は内面にしか確認できないが、内外面に塗布されていたものと思われる。焼成は良好であるが、他の2個体と同様に全体的に黒斑が見られる。

4. まとめ

車塚古墳周辺の埴輪棺は今回出土のものを含めて5例となった⁽³⁾。しかし先の4例は、車塚古墳の外堤上にはほぼ主軸と平行するよう構築され、さらに車塚古墳の埴輪を転用したものである。今回の埴輪棺は外濠のさらに外側に位置し、主軸も車塚古墳と一致しない。使用されている埴輪も車塚古墳から出土しているものとは全く異なっていることから車塚古墳と関連づけてこの埴輪

棺を考えることは不可能である。平川古墳群の各古墳から出土した埴輪と比較⁽⁴⁾した場合底径が30cm前後ある車塚古墳・梶塚古墳、黒斑が見られない芭蕉塚古墳とは全く異質のものである。底径が20～25cmで黒斑をもつ丸塚古墳・山道古墳、南側の低丘陵上に位置する芝ヶ原10・11号墳の埴輪は大きさから見れば近いと言えるが、いずれも2次調査（B種、一部にA種）が見られる。また埴輪棺の埴輪には古墳に樹立されていた痕跡が見られないことから平川古墳群内の古墳に使用されていたものを転用したものではない。これらのことからやや想像をたくましくすれば、最初から棺として使用するために埴輪製作に従事していた人間が独自に造ったものではないだろうか。成形がやや稚拙で、調整技法の省略が見られることから専門の埴輪工人ではなく、おそらく専門工人のしたで埴輪製作に従事していた人間の手によるものではなかろうか。平川古墳群を中心とする城陽市北部ではかなりの量の埴輪出土があるにもかかわらず、それらを製作した遺跡は今のところ確認されていない。しかしこの大谷川の低台地状扇状地のどこかで造られ周辺の人々がそれに動員されていたことは間違いないものと思われる。それらの人々のなかに埴輪を棺として使うという意識があったとすれば非常に興味深いことである。今回の調査では範囲が限定していたため1基のみの検出にとどまったが、周辺に存在している可能性も高く今後の調査に期待したい。

最後に埴輪棺の時期であるが、2次調査を省略したものとすれば、川西編年III期⁽⁵⁾に相当するものと思われる。実年代では、共通点が見られる埴輪が使用されている丸塚・山道古墳の築造時期5世紀前半ごろと考える。

本稿の執筆にあたって、快く資料の提供と埴輪の整理作業をしてくださった城陽市教育委員会に感謝の意を表したい。

注

- (1) 小泉裕司「久津川遺跡群発掘調査概要」(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第20集 1990年)
- (2) 城陽市北部の平川古墳群や芝ヶ原古墳群や上大谷古墳群に南部に位置する梅の子塚古墳群や宇治市域の庵寺山古墳などを含めて久津川古墳群と総称する。
- (3) 東側外堤上で2基、車塚古墳の南側を走る市道建設時（これも外堤上に相当）2基見つまっている。

山田良三「久津川車塚の円筒埴輪棺と尼塚の筒形銅器」(『考古学の旅』5)

近藤義行・伊賀高弘「久津川車塚古墳・丸塚古墳発掘調査概報」

(『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集 1986年)

- (4) 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第11～19集を参照
- (5) 川西宏幸「円筒埴輪総論」(『考古学雑誌』第64巻第2号 1984年)

編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成2年12月

紀 要 第 4 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241